

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの教育思想

—〈学校教育〉から〈生涯学習〉へ—

古川 明子

はじめに 研究の課題

本稿は、19世紀アメリカの作家ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) の教育思想の研究の一部である。特に本稿の課題は、ソローの教育思想が、19世紀アメリカ教育思想史において、どのように位置付けられるのかを明らかにすることである。

ソローは、1817年マサチューセッツ州コンコードに生まれ、生涯その地を活動の舞台としていた。オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888)、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)、ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)、ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) らと共にアメリカ・ルネッサンス (19世紀前半期) の代表的な作家、思想家として知られている。代表作として『ウォールデン』 (Walden, 1854) 『歩く』 (Walking, 1862) 『市民の反抗』 (Civil Disobedience, 1866) が挙げられる。また、湖畔に小屋を建て、自給自足と思索と自然観察の日々を過ごした「森の生活」 (Life in the Woods)¹⁾ の実践者として有名である。

19世紀アメリカという公教育制度の成立期において、作家ソローの教育思想は必ずしも十分に位置付けられているとはいえない。例えば、バッツ (R. Freeman Butts) およびクレミン (Lawrence A. Cremin) は『アメリカ教育文化史』 (A History of Education in American Culture, 1953)²⁾ においてソローについて全く言及していない。また、ソローもその一員であった超越主義者 (transcendentalist)³⁾ に関しても、「アメリカの教育にはほとんど直接的影響を及ぼさなかった⁴⁾」⁵⁾ とらえられている。

しかしながら、バッツとクレミンが別のところで「非学校形態の教育機関」⁶⁾ のうちの一つとして挙げているライシウム (Lyceum) という文化協会において、超越主義者たちは大きく貢献したのであった。ライシウムは、講演や討論会を通して成人や青少年に教育の

機会を与え、教員養成、さらには図書館や博物館の設立をめざした組織であった⁶⁾。この組織で超越主義者たちは自らの思想を、講演を通じて聴衆に伝えたのである。例えばソローは、生涯に74回の講演を行い、ライシウムの組織運営にも携わった⁷⁾。

バッツとクレミンは、こうした「非学校形態の教育機関」は「学校当局の統制下にはなかったが、アメリカ市民の態度や考えを形成するのに大きな役割を果たした⁸⁾」と述べている。それならば、ソローをはじめ超越主義者たちの文化的活動の中にある教育的意義にも光をあてる必要があるのではなかろうか。

教育をすなわち学校教育ととらえるならば、彼らの文化的活動は、教育という網の目からこぼれ落ちてしまうだろう。しかし、そこに集う人々の「態度や考えを形成する」のに生きて働いたならば、そこに教育的意義があったと考えるべきではなかろうか。

そこで超越主義者たちの中でも、少年時代からコンコード・ライシウムという活動拠点を持っていたソローに焦点をあて、その活動の教育的意義を明らかにすることを課題として定める。本稿は課題解決のための第一段階として、ソローの教育体験の軌跡をたどり、著作および「日誌」 (Journal) に記された文章をもとに、教育観の特徴をとらえていく。本稿を、筆者の19世紀アメリカ教育思想研究の序説としたい。

I ソローの学校教育体験

ソローの教育体験の軌跡をたどるにあたり、まずは学校教育体験について述べていきたい。ここでの学校教育体験とは、学校教育に何らかのかかわりをもった体験として考える。したがって、生徒・学生として教育を受けた体験のみならず、教師として教育実践に携わった体験もそれに含めている。なお、ソローの生徒・学生体験については、フィリップ・ヴァン・ドーレン・スターン著／上岡克己訳『ヘンリー・デイヴィッド・ソロー —ある反骨作家の生涯—』開文社、1989年、

H. S. ソールト著／安斎芳訳『ソーロウ・人と生涯』白鳳社、1987年の二著を拠り所とした。また、ソーロウの教師体験に関しては、上記の二著に加え、Clayton Hoagland, *The diary of Thoreau's 'Gentle Boy'* The New England Quarterly, 1855 を参考にした。

I-1 ソローの生徒・学生体験 (1823年-37年)

ソーロウが初めて学校教育を受けたのは1823年(6歳)、コンコルドのグラマー・スクールにおいてであった。このグラマー・スクールは、1647年法で100世帯以上のタウンに設置が義務付けられた学校であった⁹⁾。ソーロウはここで、カレッジ入学への準備として主としてラテン語、ギリシア語を学んだ。次にソーロウは1828年(11歳)、私立のコンコルド・アカデミーに兄ジョンと共に入学した。このコンコルド・アカデミーもカレッジへの準備教育を施す学校であった。グラマー・スクールと異なる点は、古典語の学習に加えて、英文法、綴り法、歴史学、地理学、天文学、植物学、博物学等の実用的な教科も教えられていたことである¹⁰⁾。この時期のソーロウは、学友の間で「判事」と呼ばれたほど真面目な生徒であった¹¹⁾。11歳のときには、大人に混じって討論会に参加し意見を述べるといった向上心に富んだ少年であった¹²⁾。このコンコルドでの生徒時代、ソーロウは森や川、湖を探索することを好んだ。ニューイングランドの少年の習慣にならって、狩猟用の銃や釣竿を背負って森の奥へと出かけていった。また、ウォールデン湖を訪れ、そこでの生活を夢見たこともあった¹³⁾。アカデミーの最終学年の時には、自らの手でボートを造り、河川を探索した¹⁴⁾。

ソーロウがグラマー・スクールおよびコンコルド・アカデミーの生徒であった1820年代当時は、未だ公教育制度が確立しておらず、貧しい家庭の子どもたちは家計を助けるために労働に従事せざるを得ない状況におかれていた。このような時代背景にあって、カレッジ入学のための中等教育機関に通うことができたソーロウは、当時において比較的恵まれた教育を受けていたのである。

以上のような中等教育機関を卒業し、1833年、16歳のソーロウはハーヴァード大学に入学した。当時のハーヴァード大学は牧師をはじめ、政治家・弁護士といった職に就き、将来の国家の指導的役割を担う青年の教育を目的としていた¹⁵⁾。ソーロウ研究者のカール・ボード(Carl Bode)によると、ソーロウはチャニング(Edward Channing, 1790-1856)という有名な修辞学の教授の下に学び、影響を与えられたという¹⁶⁾。チャニングは後

のソーロウに大きな影響を与えたエマソンの師でもあった。もっともソーロウは大学の正規の教育には飽き足らず、五万冊の蔵書を誇っていた大学図書館で自ら学んだ。主として、ギリシア古典文学、英文学、東洋文学の書物を読み、文章をノートに書き写すのが彼の勉強方法であった。このノートは約5、6千ページにも及んだ¹⁷⁾。そうして身に付けた教養は、後に記すことになる著作に用いられた。ソーロウはこの大学図書館を卒業して後も使い続けたのである¹⁸⁾。

さらにソーロウの学びは大学内にとどまらず、戸外にも広がっていった。コンコルドでの少年時代に引き続いての自然観察、さらに先住民であるインディアンの研究も始められた。これらの研究は生涯続けられることになるのである。また、大学四年の夏期休暇中、後の「森の生活」の前段階ともいべき野外生活を友人と共に送った¹⁹⁾。このように、図書館でのひたむきな読書と自然を舞台にした今日でいうところのフィールドワークが、ソーロウの大学時代の学びといえよう。

ソーロウは1837年8月30日、卒業式で「現代の商業精神」について演説し、四年間の大学生活を終えた。その演説を一部抜粋してみよう。

「自らの本性に忠実に、精神的愛情を培い、人間らしい独立した生活をしようではないか。富を生活の手段としても目的とはしないように努めようではないか。」²⁰⁾

スターンはこの演説を「彼が一生持ち続けた信念を表明したものである」²¹⁾ととらえている。確かに、簡素と独立を旨としたソーロウの生涯を予感させる演説である。

I-2 ソローの教師体験 (1837年-41年)

ソーロウはハーヴァード大学卒業後、職業として教師を選んだ。すでに在学中、彼は学費を稼ぐためにマサチューセッツ州カントンの学校で教壇に立ったことがあった²²⁾。教職とは当時の若い男性にとって、金を稼ぐ手段、あるいは希望する職に就くまでの一時凌ぎの場であった²³⁾。ボードは生計を立てる手段として教職に就いた者の代表としてソーロウを挙げている。とはいえ、「彼(ソーロウ)は怠惰に陥ることはなかったが」と補足している²⁴⁾。当時の教師の質はよいものではなく、怠惰な教師が多く存在していたのであった。1838年(21歳)、ソーロウはコンコルドの公立学校の教師となった。ところが、わずか二週間という短い期間で辞職してしまつたのである。生徒にむち打ちの体罰を課すべきであるという、教育委員会の指導に抵抗を示したのであると、ソールトは指摘している²⁵⁾。

その一年後、ソローは兄ジョンと共にコンコードに小さな私立学校を開いた。コンコード・アカデミーと名付けられたその学校は、中等教育機関であった。当時はこのような私立中等教育機関の拡張期に当たり、各地に州の管理下に置かれぬ学校が設立された²⁶⁾。ソローの学校も教育委員会の干渉を受けることなく、教育実践を行うことができたのである。

コンコード・アカデミーでのソローの教え子であったエドモンド・シューアルの『日誌』から、ソロー学校の実践を垣間見てみよう。

ソローの学校のスケジュールは午前は8時30分から12時30分まで、午後は2時から4時まで授業が行われた。授業科目にはラテン語、立体幾何学、代数、地理学が含まれていた。文章を書くことは生徒たちの思考の訓練になるという考えから、作文を書かせていた。さらに、町の印刷所や銃工店を見学したり、自然観察や畑仕事も行われた²⁷⁾。伝統的な教科および実用的な教科に加えて直接経験も重んじられていたのである。ソローは正規の授業以外でも、生徒と共に野外へ繰り出し、自然やインディアンに関する知識を伝えた。また、生徒たちと共にライシーアムで講演を聴くこともあった²⁸⁾。

さて、こうしたソローの学校も1841年、わずか2年間で閉校されることとなった。共同経営者であった兄ジョンの病が原因であったとスターンは指摘している²⁹⁾。

以上のようにソローは15年間もの間、学校教育を受け、その後教師として教育実践にも携わった。にもかかわらず、後年『日誌』(1859年12月31日)の中で学校教育への懐疑を次のように記している。「若者に対してにせよ、誰に対してにせよ、真理を教えようとすることはなんとむなしきことであろうか。彼らは彼ら自身のやり方で、そして準備が整った時にしか学ぶことができなからぬ。こういったからといって私は私たちの教育制度を批判するつもりはないが、それが行き着く結果がどんなものであるかを示したいのである。大学生たちはたしかに価値の高い訓練は受けるであろうが、あなたが教えようとしたことなど学んでいないのだ。彼らはせいぜい何か武器を使いたいと思った時に、兵器庫がどこにあるかを学ぶくらいものだ。」³⁰⁾

ソローは教師として生徒を教える際、何らかの失望を味わったのではないだろうか。例えば、ソローは教え子たちにエマソンの「自己信頼」(self-reliance)に関する講演を聴きに行かせたことがあった。ソロー自身はその講演に感銘を受けたが、教え子の一人エドモンドは「全く興味を覚えなかった」と記している³¹⁾。こ

の例のように、ソローは生徒の教育に対し情熱を抱いていたが、その思いは必ずしも生徒に伝わっていたとはいえない。学校閉鎖後、ソローは二度と学校教育に携わることはなかった。

II ライシーアムにおけるソローの教育体験

ここでは、学校教育を断念した後のソローの教育体験についてたどっていく。学校閉鎖後のソローは本格的に作家の道を志すことになる。そこで、作家としての成長という観点から、どのような教育体験がなされてきたのかについて明らかにしたい。なお、ここではすでに用いたスターンとソールの二著に加えて、生駒幸運『エマソン・自然と人生 —エマソンとその周辺—』旺史社、1982年、および小野和人『ソローとライシーアム —アメリカルネサンス期の講演文化—』開文社、1997年を拠り所とした。

II-1 ラルフ・ウォルドー・エマソンとの出会い

学校閉鎖後の1841年(24歳)、ソローはコンコードのエマソン宅に寄宿することとなった。それまで、教師として生徒を教える立場にあったソローだが、一変してエマソンに学ぶ者となったのである。

ソローがエマソン宅の下宿人になるまでの二人の関係について若干述べておきたい。ソローがハーヴァード大学在学中の1834年、エマソンはコンコードに移り住んだ。そのころエマソンはすでに国内講演旅行をし、1836年には『自然』(*Nature*)を出版するなど、講演者、作家として成功していた。ソローは『自然』を読み、その思想に感銘を受け、愛読書としていた³²⁾。ソローがハーヴァード大学を卒業した1837年、エマソンは知人からソローの話聞き、興味を引かれ会見を申し込んだ³³⁾。そこでソローはエマソンに認められ、友人として交際するほか、超越主義者らの主催するクラブに参加することを許されたのである。このクラブでは、機関誌『ダイアル』を発行していた。未だ修行中の作家であったソローにとって、その雑誌への投稿は実力を試し、鍛えるまたとないチャンスであった³⁴⁾。

こうした交流を経て、1841年エマソン39歳、ソロー24歳の時、ソローはエマソン宅の下宿人となったのである。住み込みの弟子のように、家事を引き受けるかわりに食事と部屋が与えられ、エマソンの膨大な蔵書を読むことができた。さらに『ダイアル』の編集助手となり、エマソンの仕事を助けた³⁵⁾。ソローはエマソンを模範としたらしく、一時期は口調、身振り、表情までもエマソンにそっくりであったといわれている³⁶⁾。ソ

ローはこの15歳年長のエマソンに師に対するような尊敬の念を抱き、「日誌」に次のように記している。

「エマソンは比類なき、すばらしい才能の持ち主だ。彼の人格は若者に大きな影響を与える。」³⁷⁾

一方、エマソンもソローに親愛の情を抱いていた。イギリスの作家トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) に次のような手紙を送っている。

「あなたの・・・読者の一人が、今私の家に住んでいます。一年後には、このヘンリー・ソロー君が、いつの日かあなたからも誇りに思われる詩人に成長して欲しいものです。彼は、詩と想像力に富む、気高くて男らしい若者です。私たちは、毎日一緒に庭で汗を流しています。」³⁸⁾

このようなエマソンの影響の下、ソローはかねてから望んでいた作家の道を歩み始めたのであった。

II-2 ソローのライシーム活動

ところで、小野和人氏は著書『ソローとライシーム—アメリカ・ルネサンス期の講演文化—』(1997年)において、エマソン、ホーソーン、ホイットマンといった当時の作家たちの講演活動について、次のように述べている。

「この時代の作家たちは、単に活字を通して不特定の読者を想定しただけでなく、講演活動を通して生身の聴衆に触れるという直接体験を味わっている。」³⁹⁾

作家を志すということは、講演者として聴衆の前に立つことでもあった。作家の道を歩み始めたソローは講演活動に積極的に取り組むようになったのである。

小野氏によれば、ソローはエマソンの作品製作工程に倣ったという。それは、「日誌→講演→著作という三段階」を踏むものであった⁴⁰⁾。「日誌」は、1837年(20歳)から61年(44歳)まで書き続けられた。日々の自然観察(動植物の観察記録)、経験、思索の結果が丹念につづられている。ソローはこの「日誌」を下敷きに講演原稿を記した。そして、それをもとに講演を行い、聴衆の反応を受け、講演原稿を練り上げ、作品を作り上げていったのである⁴¹⁾。

この一連の著作活動の重要な舞台であったのがすでに述べたライシームという文化協会であった。ソローはもちろんのこと、先に挙げたエマソンら作家たちに講演の場を提供したのがライシームなのである。このライシームについて、その設立の経過を説明しておきたい。

ライシームは1826年、地質学者・金属学者のジョサイア・ホルブルック (Josiah Holbrook, 1788-1854)

によって結成された。その目的は、「成人のために教育の機会を与えること、学校において教師の訓練と教育への関心を刺激して高めること、さらに博物学の施設や図書館を設立すること」⁴²⁾であった。最初にライシームが設立されたのは、ホルブルックが住んでいたマサチューセッツ州ミルベリーであった。以降8年間で約3000ものライシームが全米各地に作られた。コンコードにライシームが設立されたのは、ソロー12歳のときであった⁴³⁾。

一般にライシームの主な活動内容は、講演と討論会であった。講演では自然科学、社会学、地理学、文学、歴史学、教育、宗教といった分野の最新の知識や話題が話されることが多かった。討論会では、時事的、政治的、社会的問題が討議された⁴⁴⁾。教育の機会が乏しかった当時、人々はこぞって講演や討論会に駆け付けた。子どもの参加も珍しいことではなかった⁴⁵⁾。

ここで、以上のようなライシームにおけるソローの活動について述べなければならない。ソローは、本格的に作家の道を志す以前からライシームとかかわりをもっていた。彼が12歳のときコンコードにライシームが設立され、そのとき入会したかどうかは明らかではないが、少年時代は一般の聴衆として講演や討論に参加していた。やがて、大学卒業後からは、講演者および組織運営者として活躍するようになる。1838年、21歳のときには書記 (Secretary) に選出された。書記とは、講演および討論会の記録係である。そして、同年には書記よりもさらに重要な役である評議員 (Curator) に選出された。評議員には、企画作りや講演の演者を探す役割があった。ソローは1853年までに前後8回役員に選出されている⁴⁶⁾。スターンは、ソローがこの評議員の役職についていたことによって、「幾人かの著名人と懇意になり、うまく事が運ばず、自信を失いかけたときの励みにもなった」⁴⁷⁾と述べている。

ソローは最初の頃は積極的にライシーム運営に携わっていたが、著作活動が軌道に乗るにつれ、講演に専念するようになった。すでに述べたように、著作作成の一環としてライシームにおいて講演を行ったのである。ソローはコンコード・ライシームに限らず、セイラムやウースターのライシームでも講演を重ね、その総数は74回にのぼったといわれている⁴⁸⁾。

ソローにとってのライシームとは、学びの場であり、作家としての素養を高める場であった。ソローは学校教育を断念した後に、ライシームという新たな活動の場を得ていたといえる。

III 〈学校教育〉から〈生涯学習〉へ

ここまで、ソローの教育体験をたどってきた。ソローは学校からライシーアムへと自らの活動の場を転換している。果たしてソローが求めた教育のあり方とはいかなるものであったのであろうか。「歩く」、「ウォールデン」、そして「日誌」から考えてみたい。

III-1 「散歩者」としてのソロー

すでに述べたように、学校教育を断念したソローは、「歩く」においてははっきりと自らの立場を表明している。

「私は『自然』を弁護するために——単なる市民的自由や市民的教養とは対照的な、絶対的自由と野性を弁護するために——一言述べてみたい。つまり、人間を社会の一員としてではなく、むしろ『自然界』の住人、もしくはその重要な一部分として考えてみたいのである。自説を力強く表現するためなら極端な言い方もあえて辞さないつもりだ。文明の擁護者はほかにいくらでもいるからである。たとえば、牧師や教育委員会それに読者のみなさんが、こそって文明の弁護を引き受けてくれるだろう。」⁴⁹⁾

この文章は「歩く」の冒頭で、その主眼について述べたものである。要するにソローは一種の文明批判者、制度批判者としてこの「歩く」を記したのである。そして、まさに文明や制度の代表として挙げている「教育委員会」、つまりは学校教育とは対抗的な立場に自らを位置付けたのである。

さらに、ソローはこうした自らの立場を、「公道」(highway)を歩む者と対比し、「散歩者」(walkers)と称している。ソローは「散歩者」を次のように定義しているのだ。「散歩者は教会、国家、人民の域外にあって、いわば第四階級を構成しているのだ」⁵⁰⁾と。

「公道」とは文明と制度の象徴であり、国家によって定められた枠組みである。他方、「散歩道」(path)とは自ら定める道である。このような「公道」と「散歩道」の対比をもって学校教育とそれに懐疑的なソローの教育観の関係をも表すことができるであろう。公教育制度の成立期において、ソローはまさにその「公道」から離れたところで、いわば「散歩者」として教育のあり方を模索していたのである。

III-2 ソローのアンコモンスクール構想

さらにソローは、単に学校教育を批判するにとどまらず、それとは異なる教育構想を提案している。次に挙げる文章は「ウォールデン」からの抜粋である。

「われわれはコモンスクール、すなわちいってみれば、子どもたちのための学校という比較的立派な制度をもっている。しかし、冬には半ば凍死しそうなライシーアムと、最近州政府の助言で開館されたばかりのちっぽけな図書館を除けば、われわれのための学校はないのである。・・・今こそ、われわれが成人した男女になりはじめるとき、教育から離れてしまわないようなアンコモンスクール(uncommon schools)をもつべきなのである。」⁵¹⁾

ソローはこの文章において、アンコモンスクールという、コモンスクールとは異なる教育構想を提案しているのである。ソローはこのアンコモンスクールの構想について、断片的ながらさらに次のようにも述べている。以下の文章は、「日誌」から抜粋したものである⁵²⁾。

「この町の富で十分買うことができるもの、例えば芸術作品、刊行物や書籍、科学の実験器具などがそろっており、その結果、ある種の洗練された文化的な影響力が働くなら、この村を教育し村民の思想の格調を高めることができるであろうし、その結果、そのような設備を整えただけで、簡単に村は世界有数の文化の中心地となるであろう」⁵³⁾

「ニューイングランドは、世界中のあらゆる賢者を雇って教えにきてもらい、その期間中寄宿してもらったら、完全に偏狭さから免れるようになるだろう。」⁵⁴⁾

「町で唯一の図書館が、地区学校の図書館とは一体どういうことなのだ。そこには子ども向けの本、程度の低い本しかない。町は図書館をもつべきだ。たとえそんなに広くなく、大英博物館と同じようでも、選べるものが少なくても。」⁵⁵⁾

このようなソローの構想から、アンコモンスクールとは主として成人用の文化施設・設備群ととらえることができる。ソローはコンコードを舞台に、こうした文化施設・設備の調った村作りを提案していたのである。ライシーアムはそのような施設の一つとして位置付けられていた。

さて、このソローのアンコモンスクール構想は19世紀アメリカ教育思想史において、どのように意義付けることができるだろうか。

その構想は子どもはコモンスクールへ、大人はアンコモンスクールへという学校形態の異なる年齢的多様性を意味しているわけではない。アンコモンスクールとは、すでに述べたソローの学校教育への懐疑を念頭におくと、制度化された学校教育のスタイルを根底から問い直す、新しい教育の構想であったとみることができる。

というのも、すでに述べたようにアンコモンスクールは文化施設・設備であり、学校教育とは異なる教育形態として構想されていたからである。アンコモンスクールにあっては、制度的な学校教育における一定のカリキュラムや機械的に区切られた時間、固定化された指導—被指導関係は存在しない。そこにあるのは、学ぶ者の興味や必要性に応じて利用できる材料や設備である。

以上のように、ソローのアンコモンスクール構想は、公教育主体の19世紀アメリカ教育思想史の中では特異な位置を占めている。この特異性をソローの成長観の側面からさらに特徴付けておくことにしよう。ソローは「歩く」において、次のように述べている。

「われわれは今なお成長しつづつある子ども (still be growing children) でなくてはならないのに、早くも小さな大人になっている。」⁵⁶⁾

ソローは、人間の成長を子ども時代や青年時代にのみ限定していない。人間とは常に未完成であり、生涯にわたって成長し続ける存在としてとらえていたのである。ここでソローが「成長」そのものではなく、「成長しつづつある」ことを望んでいることに注目したい。

「成長」そのものを求めるならば、何らかの課題を達成することが重視されるだろう。しかし、「成長しつづつある」ためには、一つの課題を達成することだけで満足せず、常に学び続けることに重点がおかれる。このように学び、成長し続けるための材料や設備がいつでも、誰にでも利用できるように調えられていること、それがソローの求めた教育のあり方であった。そして、このソローの構想は、生涯にわたっての学びを支えるという点で〈生涯学習〉構想といえることができる。

III-3 〈生涯学習〉の実践者としてのソロー

実際にソローはその人生において、生涯探求し学び続けた。ここでは少年時代から一貫して続けられた自然観察とインディアン研究をその例として挙げてみたい。

ソローの生涯にわたる自然観察の証拠となるものは、何とんでも先に挙げた『日誌』であろう。この『日誌』は、1837年から61年までの24年間にわたって記され、総数二百万語にもおよぶ。ソローは、コンコードの森や川や湖に分け入り、その時観察した動植物の習性、足跡、卵や巣、鳴き声、植物の芽生え、開花、落葉などを記録したのである⁵⁷⁾。また、単に見るだけにとどまらず、ウォールデン湖の水深を測定したり、湖の大きさを測量し、地図も作成している⁵⁸⁾。

少年時代からのソローの自然への愛好心と探求心は生涯倦むことなくもち続けられていた。実際にソローの死を招いた原因が、皮肉にも厳寒の中での木の年輪の観察による持病の気管支炎の悪化⁵⁹⁾であったことから、彼の自然観察への情熱を知ることができよう。こうして積み重ねられた自然観察をもとに、「マサチューセッツ州博物史」(*Natural History of Massachusetts* 1842)、「森林樹の変遷」(*The Succession of Forest Trees* 1860)といった博物学に関する論文が記されたのである。

また自然観察のみならず、インディアン研究も続けられた。ハーヴァード大学在学中より、コンコードの地においてインディアンの遺物を発掘したほか、四回にわたってメイン州の原生林を訪れ、その地のインディアンと生活を共にした。

ソローはメイン州の森で出会ったポリスという名のインディアンから積極的に学ぼうとした。

「私は、この旅の間に自分の知っていることは彼(ポリス)にみな教えよう、彼も知っていることはみな私に教えてほしいと提案したところ、彼は即座に承知した。」⁶⁰⁾

ソローはポリスをはじめインディアンたちから生活の知恵、原生林の中で生きる術、彼らの言語を学んだのである⁶¹⁾。インディアンの言語に関する一覧表も作成している⁶²⁾。

ソローはこうしてインディアンたちから学んだことを、ライシームで講演した。

さらにその原稿は2つの雑誌に連載された。これらのソローのインディアン研究の成果である原稿は、ソローの死後、妹ソフィアや友人の手によって『メインの森』(*The Maine Woods*, 1864)という一冊の本にまとめられている⁶³⁾。

これまで述べてきた、自然観察とインディアン研究の2つは、ソローの生涯において重要な学びであったと考えられる。それ以外にも、実際に森の中で簡素な生活を営むことによって、いかに生きるべきかを学び取ろうとした「森の生活」も探求の一例であろう。

ソローは、そうした実際の探求の過程において、図書館やライシームを十分に利用した。ソローの提案した教育構想には、こうした彼の実際の経験が反映されていたと考えられる。

おわりに 今後の課題

本稿では、ソローの教育体験を振り返り、彼が学校教育の枠組み以外の、いわば〈生涯学習〉構想ともい

うべき教育のあり方を構想していたことを明らかにした。しかし、これはソローの教育活動や教育観のおおよその傾向をつかんだにすぎない。ソローの教育思想を19世紀アメリカ教育思想史において位置付けるには、ソローのライシーアムにおける活動とそれのもつ教育的意義、ライシーアムという教育機関が人々に与えた影響に関する綿密な検討が必要である。今後は主としてソローのライシーアム活動について研究を進めていきたい。

註

- 1) 「ウォールデン」の初版(1854年)には、副題「森の生活」(*Life in the Woods*)がつけられていたが、1862年ソローの希望によりこの副題は消されている。彼の生活実践はこの副題と同じく「森の生活」と呼ばれてきた。
- 2) R. F. バッツ, L. A. クレメン著/渡部品, 久保正三, 木下法也, 池田稔訳『アメリカ教育文化史』学芸図書, 1977年。
- 3) 超越主義は、カントの先験哲学をその源に持ち、アメリカ・ルネサンス期にニューイングランドを中心に発展した直観的、感覚的認識を重視した思想であった。主な思想家として、エマソン、オルコット、マーガレット・フルーらが挙げられる。斎藤光「エマソンと超越主義」斎藤光訳・解説『アメリカ古典文学17超越主義』研究社, 1975年, 5頁-28頁参照。
- 4) バッツ, クレメン前掲書, 194頁。
- 5) バッツ, クレメン前掲書, 275頁。
- 6) Carl Bode, *The American Lyceum*, Southern Illinois University Press, 1968, pp. 24. 25.
- 7) 小野和人「ソローとライシーアム—アメリカ・ルネサンス期の講演文化—」開文社, 1997年, 60頁, 67頁。
- 8) バッツ, クレメン前掲書, 277頁。
- 9) 津布楽喜代治「植民地時代の教育」梅根悟監修『世界教育史体系 17 アメリカ教育史』講談社, 1975年, 23頁。
- 10) フィリップ・ヴァン・ドーレン・スターン著/上岡克己訳「ヘンリー・デイヴィッド・ソーロウ—ある反骨作家の生涯—」開文社, 1989年, 7頁。
- 11) H. S. ソールト著/安斎芳訳「ソーロウ・人と生涯」白鳳社, 1987年, 25頁。
- 12) 1828年, ソロー11歳のとき「コンコード研究討論会」が開かれた。「役に立つ記憶力を養うことは、卓越した学者になるために良き判断力を身につけることよりも大切なことであろうか」というテーマで討論がなされ、ソローは反対意見を表明した。そして、4票の差で彼の意見は承認された。ソールト前掲書, 29頁参照。
- 13) ソールト前掲書, 24頁。
- 14) スターン前掲書, 8頁。
- 15) 津布楽前掲論文, 24頁。
- 16) カール・ボード「ソロー—二重の意味の否定—」カール・ボード編/中島時哉, 斉藤久, 生駒幸運, 中村幸雄, 川成洋, 木村正俊, 木下高德訳『アメリカ文学における反逆者たち』南雲堂, 1981年, 8頁。
- 17) スターン前掲書, 10頁。
- 18) ハーヴァード図書館から本を借りることができるのは、教職員および学生、ケンブリッジ(大学の所在地)から10マイル以内に住んでいる者に限られていた。ソローはその資格に欠けていたが図書館を利用する必要性を感じ、1849年, 学長宛てに使用願いの手紙を送った。学長は、一年という期間に限り使用を認めたがソローはこれを無視し、図書館を使い続けたという。スターン前掲書, 118頁参照。
- 19) ソローのコンコード時代からの友人チャールズ・ウィラーは、フリント湖畔に草庵を建てた。ソローはそこで数週間ウィラーと共に共同生活を送った。スターン前掲書, 13頁参照。
- 20) スターン前掲書, 16頁。
- 21) スターン前掲書, 16頁。
- 22) 1835年11月, ハーヴァード大学は、困窮学生が学費を稼ぐために教職につくことを許可し、13週間の休暇を与えた。ソローは翌年の春まで教職についていたという。(酒本雅之「ヘンリー・D・ソロー略年譜」ソロー著/酒本雅之訳『ウォールデン』築摩書房, 2000年, 507頁)
- 23) Carl Bode, *op. cit.*, pp. 110-111.
- 24) *ibid.*, p. 110.
- 25) ソールトは、ソローの友人エレリー・チャニングの証言をもとに「彼が仕事を辞職した主な原因は、体罰の問題にあった」と指摘している。その証言とは、ソローが体罰をやめて「[話をして聞かせる説教]に置き換えるべきである」と主張したというものである。(ソールト前掲書, 38頁)また、ソロー自身もこの件に関してオレスティーズ・ブラウンソンに次のような手紙を送っている。
「僕は教育を、教師にも生徒にも共に楽しめるものにしたかったです。……僕は牛革の鞭を絶縁体と考えたいのです。鞭は電線と違って、眠っている知性

- に真実の閃きを少しも伝えることなどできないので
すから。」(スターン前掲書, 20頁)
- 26) 真野宮雄「近代公教育制度の成立」梅根悟監修「世界教育史体系 17 アメリカ教育史」講談社, 1975年, 161-164頁.
- 27) Clayton Hoagland, *The Diary of Thoreau's 'Gentle Boy'*, *The New England Quarterly*, 1855, pp. 478-482.
- 28) Clayton Hoagland, op. cit., p. 477.
- 29) スターン前掲書, 33頁.
- 30) Henry. D. Thoreau, *Journal 13*, *The writings of Henry David Thoreau*; vol. 19, edited by Bradford Torrey, AMS press, New York, 1968, p. 67.
- 31) Clayton Hoagland, op. cit., p. 477.
- 32) スターン前掲書, 40頁.
- 33) 生駒幸運『エマソン・自然と人生 — エマソンとその周辺 —』旺文社, 1982年, 150頁.
- 34) ソローはこの「ダイアル」に幾度となく論文や詩を投稿した。ソールトによれば「これは文学の見習い期間にすぎ」ず, 「彼の論文のいくつかは, マーガレット・フラーが編集していた期間中, 彼女がその未熟さと欠点を非難するあからさまな批判を下し, 没にされた」という。ソールト前掲書, 53頁参照.
- 35) ソールト前掲書, 67頁.
- 36) ソールトはソローのハーヴァード大学時代の友人の証言を挙げている。
「私は、彼に生じた変化に大変驚いた。作法, 声の調子, 言い回し, さらに話し中に口ごもったり, 話の区切り方などは, エマソン氏によく似たものになっていた。」(ソールト前掲書, 63頁)
- 37) *Journal 1*, pp. 432-433. この記述には, 日付が記されていない。編集者ブラッドフォード・トリーによれば, 1845年から1847年の間に書かれたとされている。すなわち, エマソン宅での寄宿(1841年~1843年)の直後に書かれたと推測される。
- 38) スターン前掲書, 43頁.
- 39) 小野前掲書, 41頁.
- 40) 小野前掲書, 40頁.
- 41) 小野前掲書, 41頁.
- 42) 小野前掲書, 4頁.
- 43) 小野前掲書, 9頁.
- 44) 小野前掲書, 21-37頁. 小野氏はコンコード・ライシームにおいて, 1829年から1881年までに行われた講演会の内容や回数を調べ, 一覧表を作成している。
- 45) 小野氏によると, 講演会が少年たちの私語によって悩まされ, それを阻止するべく小委員会を作る動きがみられたという。(小野前掲書, 9頁)
- 46) 小野前掲書, 60-62頁.
- 47) スターン前掲書, 26頁.
- 48) 74回という講演の回数は, 米国のソロー学会(Thoreau Society)事務局長であるディーン氏によって調査されたものである。(小野前掲書, 67頁)
- 49) H.D.ソロー「歩く」同著/飯田実訳『市民の反抗』岩波書店, 1997年, 106頁.
- 50) 「歩く」108頁.
- 51) Henry. D. Thoreau, *Walden*, *The writings of Henry David Thoreau*; vol. 2, AMS press, New York, 1968, pp. 120-121.
- 52) 「ウォールデン」の中には「日誌」をもとに作られている部分があり, このアンコモンスクール構想についても, まず「日誌」においてその考えが記されている。
- 53) *Journal 3*, p. 26.
- 54) *Journal 4*, p. 323.
- 55) *Journal 3*, p. 26.
- 56) 「歩く」, 156頁.
- 57) 本稿で使用している「日誌」(Bradford Torrey ed., *The Writings of Henry David Thoreau, Journal*, AMS press, New York, 1968)において編集者トリーは目次を作成している。その目次からソローが興味や関心を抱いていたものをうかがうことができる。
- 58) スターン前掲書, 82頁.
- 59) スターン前掲書, 166頁.
- 60) ヘンリー・D・ソロー/小野和人訳『メインの森 — 真の野性に向かう旅 —』講談社, 1994年, 240頁
- 61) ソローは「宣教師から学ぶことはないがインディアンから学ぶべきことは多い」と述べている。(『メインの森』, 256頁)
- 62) 「メインの森」, 447頁-457頁.
- 63) 「メインの森」, 461頁.

Educational Thought of Henry David Thoreau

—From <formal education> to <life-long learning>—

Akiko Furukawa

This paper aims to consider the educational thought of Henry David Thoreau(1817-1862) in the context of American educational history in the nineteenth century.

The contents of this paper are as follows;

Introduction. The aim of the study

I Thoreau's experience of formal education

I - 1 . Thoreau's experience as student (1823-37)

I - 2 . Thoreau's experience as teacher (1837-41)

II Thoreau's experience of education at Lyceum

II - 1 . The encounter with Ralph Waldo Emerson

II - 2 . Thoreau's activities at Lyceum

III From formal Education to Life-long education

III - 1 . Thoreau as walker

III - 2 . Thoreau's conception of 'Uncommon Schools'

III - 3 . Thoreau as life-long learner

Conclusion